

# PBL テュートリアル方式による 作業療法臨床実習の教育効果の検討

篠田 峯子 丹野 きみ子 小田川 雅一

## The Study about Effectiveness of Clinical Education of OT students by PBL tutorial method

Mineko Shinoda, Kimiko Tanno, Masakazu Odagawa

### 抄 録

学内教育との一貫性、実習地への適応、実習課題の遂行などの問題点への解決方法として、本学科第2学年に実施する臨床実習Ⅱの精神障害領域（5日間）でグループ実習を導入した。実習指導者12名、および2005年度の学生95名2006年度の学生92名学生の意見をアンケート調査によって集約し、グループ指導の効果を検討した。

指導者は学生の主体的学習態度、患者の負担軽減などの長所が上げられる一方、学生の組み合わせによっては、他学生に依存してしまう者が出るという短所も指摘された。しかし2005年度にくらべ2006年度ではグループ指導を実施した施設が増加し、グループ指導が肯定的に受容されていることを示唆していると考えられる。学生のアンケート結果、指導方法と人数について、グループ実習を体験した学生の約80%が、3名と言う人数は適切であったと述べている。また、グループ実習では視野が広がり実習成果をあげることが出来、ディスカッションを通して課題を進めるという授業で実施している学習形態と同じ形で実習を行えるため、実習地への適応もスムーズであると言う事が示唆された。一方、「もっと密接な指導を受けたい」、「グループのメンバーと円滑なコミュニケーションがもてない」、「学生同士が馴れ合ってしまう、自己の課題達成がなされない」など、グループになじめない学生や、個別指導で「指導者を独占できる」、「個別指導を受けられるということは特典」などの幼さを示す者もいた。このような、グループ関係をうまく結ばず、実習が円滑に進められなかった学生に対する指導のあり方に対する課題が残された。しかし、グループ実習は限られた条件の下で多数の学生の実習を行うということに対して一定の効果を上げることができたと考えられる。

キーワード：作業療法

臨床実習

問題基盤型学習（PBL）

本研究の目的は、グループ指導を通じた臨床実習における学習効果と、効率を検討することにある。実習指導者および、学生の意見をアンケート調査によって集約し、グループ指導の効果を検討した。

## PBL (問題基盤型学習 Problem Based Learning)

問題基盤型学習 (以下 PBL) 方式の授業は、カナダの McMaster 大学で始められ、世界的に広まった授業方法で、情報収集・分析・問題解決を行うという主体的学習態度とグループ討論を通してコミュニケーションの技能と態度を身に付けることができるといわれている<sup>1)</sup>。従来の講義中心の授業形態では、伝えた情報の数%以下しか学生の身に付かず、主体的学習方法や、発表することを通して学んだ知識は、50~80%が身に付くことが報告されている。伝えるべき情報量は年々増大しており、一方通行の授業を実施する限り、授業時間数を限りなく増やしていかなければならなくなる。これらの問題に対処するべくわが国の医学教育の分野では、PBL 方式の教育方法はまず東京女子医科大学ではじめられ、現在では全国の医科大学80校のすべてで、多少なりとも導入され、作業療法教育でも導入が始まってきている。

本学の精神障害領域の作業療法関連科目の5科目は、開学時より、グループ討論を取り入れた授業を展開していた。2005年度より、主体的学習態度およびコミュニケーション技能の向上を目指して PBL 方式によるグループ討議と講義を組み合わせた授業形態、いわゆるハイブリッド PBL の形態に改変した。5~6名のグループで教員が提示したペーパーペイシエントについて、学生が問題点や、ストレングス、資源を評価し、作業療法のプログラムを考えた後に、系統的授業を実施する形態をとった。一般に、PBL はテュートリアル方式で行われる事が多いが、本学の場合、教員数やカリキュラム上の理由から、テュートリアル方式とはらずに、約50名の学生に対して、1~2名の教員が指導にあたった。学生は、グループ討論の結果を、口頭発表し、他学生からの質問や意見を受け、教員からのコメントを受けた。

## 作業療法学士教育における臨床実習の現状

作業療法の臨床実習は理学療法士作業療法士養成施設指導要領では臨床経験3年以上の指導者1名に実習生2名程度が望ましいとされており、1963年に作業療法士の養成が開始されて以来、個別指導によって実施されてきている。しかし、養成施設の急増に伴い実習施設の不足は深刻な問題となっている。2007年8月現在の作業療法士の免許取得者は38,097名、現在の学生の一学年定員は7,276名である。通常、1人の学生は、在学中に2~3学年にわたって2~5箇所以上の施設で実習を行う。本学作業療法学科でも、1年生~4年生までに渡って、実習を実施しており、学生1名が必要とする実習施設数はのべ6箇所となっている。実習指導者は多数の養成施設や大学からの実習生を受け入れており、個々の学生が受けてきた授業形態や内容にあわせた実習を実施すること

は非常に困難な状況となっている<sup>2)</sup>。

また一方、学生は、臨床現場という未経験の場所での適応に際してさまざまな問題に遭遇する。学内教育で学んだことが臨床教育では必ずしもそのまま通用するわけではない。実習指導者との人間関係の構築や新しい人的・物理的環境適合と並行してさまざまな実習課題を遂行しなければならない。特に、短期間の実習では、場に適応するだけのために、大部分のエネルギーを使い果たしてしまい、実習課題の遂行は十分な成果をあげ難い状況がおきる。

### グループ実習導入の目的

上記の問題すなわち、学内教育との一貫性、実習地への適応、実習課題の遂行などについての解決方法として、第2学年に実施する臨床実習Ⅱの精神障害領域（5日間）でグループ実習を導入した<sup>3)</sup>。

第2学年では前・後期を通して精神科作業療法に関する3科目の授業を行い、1月～3月に臨床実習Ⅱを実施した。実習は、3人を1グループとしたグループ実習と、従来型の個別実習を受けた2群に分け実施した。グループ実習は、1名の患者を3人の学生が同一あるいは別個の場면을観察し、診療記録やスタッフから情報を収集し、得た情報についてグループ討論を行い、結果をまとめて指導者に報告し、指導を受けた。これは、授業で行ったグループ討論と類似した学習形態である。前日の討論や指導の結果に基づき、次の日にさらに必要な情報を収集する、という形態で実習は進行した。大学の教員（助手）が実習施設に出向き施設の作業療法士とともに指導にあたった施設と、施設の指導者単独で指導にあたった施設があり、その内訳は表1に示す。個別実習では、学生1名1名が単独で担当した患者について情報を収集し、結果のまとめ、指導者への報告を行い、指導を受けた。<sup>4)</sup>

表1 指導形態

	2005年度	2006年度
グループ	65人 (48)	82人 (40)
個別	26人	13人
計	92人	95人

( ) 内は教員が引率した学生数の再掲

### 実習結果の評価

実習終了後、2005年度の実習指導者12名、及び2005年度の学生92名、2006年度の学生95名によるアンケート結果を基礎データとして結果をまとめた。

## 実習指導者のアンケート結果

2005年度の実習施設数は14施設、内グループ指導を実施した施設は4施設であった。アンケート調査には12施設の協力が得られたが、母数が少数なので、統計処理はせずにコメントを中心に結果をまとめた。

グループ指導という形態は指導者にとってなじみのない方法であり、抵抗感があることは否めず、実施の過程で数回の説明を行う必要があった。長所として、3点が挙げられた。

- ① 学生が主体的に学習に取り取り組む姿勢が見られた。
- ② 学生が担当することを対象患者に告げることなく実施できるので、負担が少ない。
- ③ 学生の組み合わせによる変化が面白い。

また、学生の組み合わせによっては一人に依存して受動的になる学生も出る、従来の個別指導と比較して成果があげ難いのではないかとの懸念も指摘された。

## 学生のアンケート結果

### 1. 指導方法と人数

グループ実習を体験した学生の約80%が、3名と言う人数は適切であったと述べている。「グループの人数が3人で話しやすい」「3人で意見を出し合いちょうどよい」「3人で意見交換や情報の共有がやりやすい」「協力し合うにはちょうどよい人数」などの感想がコメントされていた。一方、不適切と回答した者からは、「3人だと病院内で邪魔になってしまい、迷惑ではないかと思った」「3人の中でケースと関われない人がいた」「複数で一人のケースを受け持つのは実習しづらい」「3人だとその場にいつらいこともあった」などの意見が出された。

### 2. グループ指導、個別指導の長所、短所

グループ指導、個別指導の学生から見た長所、短所を、2006年度にアンケートの自由記載部分から抽出した。これらの、コメントから、グループ実習と言う形態は、個人で実習するより、視野が広がり実習成果をあげることが出来、実習地への適応もスムーズであると言う事が示唆された。大学側が期待した効果が、学生の意見を通して表明されたと言えるであろう。

#### (1) グループ指導

グループ指導については肯定的なコメントが多かった。学内での学習形態の延長でもあり、他学生から、自分にない視点を学ぶなどスムーズに実習の場に溶け込んでいる様子が窺えた。一方、グループ指導の短所として「もっと密接な指導を受けたい」、「グループのメンバーと円滑なコミュニケーションがもてない」、「学生同士が馴れ合ってしまう、自己の課題達成がなされない」などを挙げている者が少数いた。これらは、学生

表2 指導方法と人数 (2006年度)

		2005	2006	計
グループ指導の人数	適切	50	68	118
	不適切	4	4	8
	どちらともいえない	10	9	19
	回答なし	1	1	2
個別指導		26	13	39
計		92	94	186

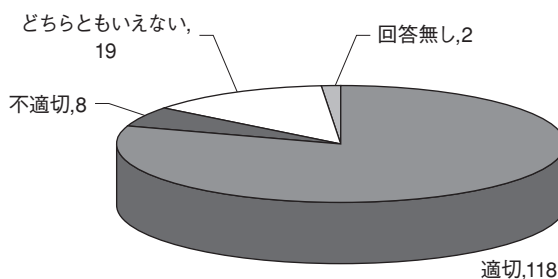


図1 グループ指導の人数について

自身の対人関係の持ち方や社会性の幼さを露呈していると考えられる。むしろこのような学生こそが、グループ実習を必要としていると言えると考えられる。(表3)

### (2) 個別指導

個別指導を受けた学生は、単独で実習に「挑む」気概を持つものと、反対に、指導者を独占でき、個別指導を受けられることを特典として受け取っている幼さが見える者が混在していた。

また、短所としてあげられたものは、グループ指導の長所の裏返しとなっていた。(表4)

### 3. 指導内容

グループ、個別にかかわらず、肯定的な意見が多く(約67%)、指導そのものについては満足している傾向が示された。

#### (1) 親切、丁寧な指導を評価する表現が多い。

- ・ 丁寧に指導してくれた。
- ・ 誰に質問しても丁寧な答えが返ってきた。
- ・ 疑問点も的確に説明してくれた。

- ・ 質問に対して分かりやすい説明だった。
  - ・ プログラム終了ごとに OTR からのフィードバックがあった。
  - ・ 観察の視点についてアドバイスを受けた。
  - ・ 大学の先生と、施設の OT の先生両方からコメントしてもらえた。
  - ・ 大学の先生がいるので、自分たちのレベルをわかって指導してもらえた。
- (2) さまざまな体験をさせてもらった。
- ・ 音楽祭への参加経験ができた。

表3 グループ指導の長所と短所

長 所
<p>a. <u>他者の意見が聞けて視野が広がり、内容を深く考える機会となった (39名)。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の気がつかないポイントなどを補ってもらい、相互に補足し合える。</li> <li>・ 自分の気がつかない疑問点が、他者の質問によって明らかになって知ることができた。</li> <li>・ 色々な幅広い視点から評価ができる。質の高い評価ができる。</li> <li>・ 他の学生とディスカッションしながら、一緒にステップアップできた。</li> </ul> <p>b. <u>初めての長期の実習であり、社会経験の浅い学生にとって、グループでの実習は不安が緩和され、疑問点等への取り組みや自分自身への気づきなど吸収する事が多い (6名)。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生同士で相談ができ、特に遠隔地の場合など不安が解消する。心強い。</li> <li>・ 役割を分担できる。</li> <li>・ 対人関係の改善になる。</li> <li>・ 実習は3人でも大変だったが、一人ではなお大変だと思う。</li> <li>・ 他者の良い点、悪い点を聞くことで自分の改善もできる。</li> <li>・ 何でも聞きたい事が遠慮しないで聞ける。ちょっとした分からないことも聞きやすい。</li> </ul>
短 所
<p>a. <u>「一人一人詳しく指導してもらえない」という言葉に象徴されるように、個別に指導を受けたいとの要望がある。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 一人一人の疑問に対応しづらいと思う。</li> <li>・ 個別のフィードバックの時間が短くなる。</li> <li>・ グループ実習は発表の効率が悪い気がする。</li> </ul> <p>b. <u>3人というグループでの話し合いが成立しにくい。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3人で時間を合わせてレポートなどを仕上げるのは難しい。意見がまとまらず、時間がかかる。睡眠時間が削られる。</li> <li>・ 3人でいると居づらいこともあり、邪魔になっていたのではないかと感じた。</li> <li>・ 3人で協力できる所はいいが、意見が合わないところがよくない。けんかになる。</li> <li>・ 一人の患者さんを担当させてもらう方が患者さんとコミュニケーションはとりやすい。</li> <li>・ 何も発言しない人が出てくる。</li> </ul> <p>c. <u>仲がよいと緊張感がもてなかったり、依存しやすい現象がおきることになる。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 仲のよい子と行くと、だらだらしてしまう。</li> <li>・ 人に任せる、依存する部分が出てくる。(誰かに頼ってしまう)</li> </ul>

表4 個別指導の長所と短所

長 所
<p><u>個人で緊張感はあるがその分やりがいがあるし、指導者との関係も1対1という方式によって得る所が大きいとの意見がだされている。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分で最大限考える事ができた。</li> <li>・全てを一人でやらなければならない為、その分力がつく。</li> <li>・腹をくくって実習に望める。</li> <li>・個人では他人に気を使う事がなくてよい。</li> <li>・指導者を独占でき、十分に指導してもらえる。</li> <li>・個別的に説明してもらえるので分かりやすい。</li> <li>・集中して実習ができる。(すべて自分でやらなければならないので)</li> <li>・何でも聞きたい事が遠慮しないで聞ける。</li> </ul>
短 所
<p><u>不安が高くなりやすく、本来の実習に取り組むに当たって疑問点など気がつきにくい。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他者との意見交換ができない。</li> <li>・不安が強い。</li> <li>・疑問が何かを言えない。</li> <li>・協力し合う経験ができない。</li> </ul>

- ・ さまざまなプログラムを見学できた。
- ・ 色々な病棟での患者さまの様子を観察できた。

グループ、個別にかかわらず学内では体験できない、綿密な指導を受けことによって、積極的な学習姿勢が育まれていっていることを窺わせる記載が目立った。学生一人一人の疑問に指導者が、即座に丁寧に答え、対応してくださっていることから、学習することの楽しさ、積極性を引き出していると思われる。

## まとめ

グループ指導によって、学内教育との一貫性についてどの程度課題が達成できたであろうか。十分ではないが、個別指導の場合と比べると、効果があるといえる。ディスカッションを通して課題を進めるという授業で実施している学習形態と同じ形で実習を行えるため、実習の進行がスムーズであったと考える。この点は、アンケート結果には現れていないが、訪問指導中に、指導者からたびたび「よく話し合っている」、「質問が多く出される」、「調べるよう指導するとスムーズに行動に移せる」などコメントされた。さらに、学内では5～6人1組のグループで実施しているが、実習では3人1組とした。このことは、社会的関係の基本形である三者関係と言う対人関係にすることによって、実習施設と言う不慣れな環境下での負担を軽減して全員がディスカッションに参加しやすいよう図った。学内教員が引率して実習した場合は、学生の能力、特性、学内教育の内容を理解した上で実習をしているので、学生のより安心感が高く、指導が学生のニーズに適合していることがアンケート結果でも示されている。

ついで、実習地への適応と実習課題への取り組みについては、学生アンケートでコメントを記入している件数は多くはないが、適応にエネルギーをとられていない分、課題遂行に注意が向いていることが窺える。

また、計画当初は目的としていなかった、患者に学生が担当することを伝えることの困難さが、軽減されると言うメリットが指導者から挙げられた。学生の担当がつくと言うことは、患者にとって負担になることがある。実習生が急増した結果、同じ患者を次々と学生が担当するということも少なくない状況である。しかし、担当ではなく、見学生として紹介し、振舞えると言うことで実習の場の確保が容易となる可能性が示唆された。

## 謝辞

本研究の実施にあたり、快く新しい方法での実習を引き受けてくださった指導者のかたがた、とりわけ50名近い学生を受け入れてくださった青梅成木台病院の皆様にご心から感謝申し上げます。また実習終了後のアンケート調査にもご協力くださり、あわせて訪問指導時などの面談でも貴重なご意見を寄せていただいたことにも感謝申し上げます。実習を受けた学生は真摯な態度でアンケートに協力し、忌憚のない意見や感想を寄せてくれたことに敬意を表します。

## 引用文献

- 1) 吉田一郎、大西弘高編実践 PBL テュートリアルガイド p 15～23、南山堂、2004
- 2) 丹野きみ子、篠田峯子：PBL 方式による臨床実習、第10回日本作業療法教育学会、2005.10.9
- 3) 日本作業療法士協会、「作業療法士の養成」作業療法白書2005 p 63～70、2006
- 4) 森 美智子他：問題基盤型学習 (PBL) テュートリアル教育の3年間の評価、日本赤十字武蔵野短大紀要第16号、2003.



## Abstract

The Occupational Therapy Department at Health Science University has adopted a five-day clinical practice in a group setting for second-year students. This is a report of the results from a survey of 12 clinical supervisors and 187 students. 80% of the students expressed a positive attitude toward the size of the group. They stated that the group discussion stimulated their ideas. It appeared to be easier for the students to adapt to the clinical situation through a learning method that simulated the clinical environment than traditional classroom instruction.

However, those students who lacked group discussion skills expressed difficulty communicating with group members as well as with patients. Moreover, they complained of a lack of close supervision. They wanted more attention and individual feedback from the supervisors.

The results suggest that this group setting clinical practice is effective for most of the second-year students. Developing an effective method for less mature students with less developed communication skills will be the subject of further study.

Key Words : occupational therapy  
clinical education  
problem based learning (PBL)